

練馬区長賞

『暮らしの支え』

練馬区立大泉第二中学校

二学年 宮里 南津子

「子ども医療費助成制度」。前にニュースでこの言葉を聞いたことがある。小学生の頃、

私は子供に医療費はかからないと思っていました。病院で診療を受けても親がお金を払う姿を見たことがなかったからだ。しかし、「助成」という言葉を聞いて調べたところ、子どもの医療費はタダではなく、税金によって無償になっていることを知った。

私は頻繁に通院していた時期がある。一歳から五歳まで、寒い季節になって風邪をひくと滲出性中耳炎になっていた私は、よく病院に通っていた。滲出性中耳炎は幼児がかかりやすく、痛くならないため気づかないでいると難聴が進む可能性がある病気だそうだ。秋になると週に何回か母に車で耳鼻科に連れて行ってもらい、診療を受け、薬をもらうようになり、それが春まで続いた。母にその頃の話を聞くと、医療費がかからないのは助かったと言っていた。病気が悪化して、医師に毎日来てくださいと言われる時もあったそうだが、医療費が無償でなかったら言われたとお

り頻繁に私を通院させることは難しかったのかも知れない。

子どもは病気にかかりやすく、その分病院に行くことも多い。そのことを考えると、助成制度があるおかげでたくさんの方の負担が軽減されていて、私たちが健康な生活を送る上で税金は大切な支えになっていると感じた。私の場合、中耳炎は命にかかわる大きな病気ではなかった。それでも、頻繁に通院する必要があり、きちんとした治療を受けられなければ耳が聞こえなくなる可能性があった。病気の重さや状況は様々だが、子どもの医療を受けやすい環境が整えられていることは、子どもやその家族たちにとって、とても救いになるのだと思った。

幼い頃は気づかなかったが、身近なところで税金に支えられていたことを知った。税金の三割が社会保障に使われているため、納税はお世話になっている環境や、支え合う社会を守ることに繋がると思った。新しくできたり、変化したり、税金は社会の状況に合わ

せて動いていて、その時々あらゆる形で社会を支えている。大人になると消費税などの他に、納める税が増えるため税金に関わる機会も増える。「子ども医療費助成制度」が、東京都では今年から高校生まで拡大されたことを知って、支援が広がって必要なのところに行き届き、よりよい生活を送れるようになってほしいと思った。そのために、社会に出てきちんと税金を納め、これからも関心を持って過ごしていきたいと思う。